

縄文時代の丸石

―栃木県那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査事例から―

ごとうしんすけ⁽¹⁾
後藤 信 祐

はじめに

- | | |
|---------------|-------------|
| 1 縄文時代の丸石研究史抄 | 4 丸石出土状況の特徴 |
| 2 槻沢遺跡の丸石調査事例 | 5 まとめ |
| 3 周辺地域の丸石出土事例 | おわりに |

今から30年以上前、平成3～5年度の槻沢遺跡の発掘調査で確認した丸石という遺物。その後、本県の縄文時代の発掘調査報告書は数多く刊行されるが、一向に類例は増えない。ここでは槻沢遺跡の丸石の出土状況を示し、関連する県内及び近県に類例を求め、出土例の多い甲信地方の丸石の時期や出土状況について検討を行った。槻沢遺跡8例、栃木県・福島県の5遺跡6例の出土状況等を検討した結果、縄文中期後葉～末葉の竪穴住居跡出土例が多く、後期初頭に屋外遺構の出土例がみられること、竪穴住居出土事例では火災住居・倒置深鉢・石棒（立石）の共伴の割合が高く、甲信地方の丸石の時期や出土状況などが酷似し、埋甕や石棒祭祀・曾利式系土器などを含め甲信地方との関連が注目される遺物であることを改めて確認した。

はじめに

栃木県ではほとんど耳にしないが、縄文時代に丸石という遺物がある。その名の通り球形の丸い石で、自然のもの、少し加工されたものがある。敲打痕や磨痕のような明らかに人の手が加えられたとわかるものが少ないため、本県では遺物として認識されることはきわめて少ない。大きさは、ソフトボール大からサッカーボール大、さらには一人ではかかえきれないほどの大きさのものもある。

筆者は、平成3～5年度に西那須野町（現那須塩原市）槻沢遺跡の県営圃場整備事業に伴う発掘調査を担当したが、調査開始時には丸石についての知識は全くなかった。平成4年度の発掘調査も終盤にさしかかったころ、長さ40cmの棒状の立石と直径40cmの球形の石が2mほどの間隔で出土した遺構（SX-25）に遭遇し、早速に類例を探したところ、甲信地方の縄文時代に丸石という遺物が存在することを知った。その後、平成5年度の調査で丸石と思われるものが3軒の竪穴住居跡から出土し、それまで調査した住居跡の遺物出土状態の写真と実測図を確認したところ、3軒の竪穴住居跡で丸石と思われるものが出土していたことを確認した。

本稿では、槻沢遺跡の発掘調査時に遺物として丸石を見逃してしまったことへの自戒と、今後の発掘調査で丸石を遺物として認識し記録することを願い起稿する。

1 縄文時代の丸石研究史抄

近年、「丸石の考古学的研究」を発表した松村佳幸も指摘しているように、分布の中心である甲信地方でも丸石を取り上げた研究は少ないようである（松村2022）。ここではまず縄文時代の丸石について、先学の研究を参考に簡単にまとめ、その現状を把握しておく。

(1) 那須烏山市教育委員会

最初に縄文時代の丸石を遺物として認識したものは、1955年の長野県中原遺跡の調査報告であろう。宮坂英次が敷石のところにあった卵形に成形した安山岩を安置したものと解釈している（宮坂1955）。1976年には、八幡一郎が南佐久郡川上村の大深山遺跡の調査で、住居跡から出土した球石を何らかの目的で成形し置いたものとし、さらに球状の石と棒状の石（石棒を含む）の組合せを指摘している（八幡1976）。

その後、大規模開発に伴い発掘調査も急増し、長野県や山梨県で縄文時代の丸石出土例も増え、『どるめん』誌上で「丸石神と考古学」というテーマの座談会で民俗学と考古学それぞれの立場から検討がなされている（中沢他1981）。

1987年には、田代孝が山梨県の丸石の出土資料を集成し、①甲信地方では丸石は縄文時代中期後半を中心に前期から晩期までみられること、②中期後半は住居跡、後晩期は屋外配石遺構からの出土が多く、中期末・後期初頭頃から屋外祭祀の性格を持つようになること、③中期後半に限ると曾利式土器文化圏の中に入ると予想されること、④丸石と石棒・立石は強い関連性があり、丸石を石棒同様、生産活動全体に関わる祭祀具と捉えられることなど、先学の研究を踏まえた見解を示している（田代1987）。

その後、丸石の発掘調査資料は増えるものの、目立った研究は見られない。2014年、新津健が中部地方の縄文集落の信仰・祭祀を論じるなかで、丸石についても取り上げている。埋甕近くの出入口付近出土例、柱穴際出土例、炉周辺及び炉内出土例、石棒や伏甕（倒置深鉢）と共伴する奥壁出土例を示し、住居廃絶時の祭祀行為という性格を指摘している。また、後期にも住居の炉や出入口から出土する例が残るものの、敷石住居も消滅する加曽利B式期ごろが住居内から屋外配石への転換期と予想している（新津2014）。

2017年、山梨県北杜市考古資料館で石棒と丸石の企画展が開催された。担当した松村佳幸は2022年に北杜市の縄文時代の丸石25遺跡75遺構を集成し、住居跡の出土例が7割を占め、北（奥壁）側と炉跡及び焼土からの出土が多いことを指摘し、新たに埋甕内出土例をあげている（松村2022）。

甲信地方以外で丸石を取り上げたものには、筆者が槻沢遺跡の報告書で、後述するSX-25を集落内の祭祀施設と捉え、石棒・立石・埋甕・伏甕（倒置深鉢）などの屋内祭祀や連弧文・曾利式系土器などとともに中部～西関東地方から伝播してきた可能性を指摘した（後藤1996）。そのほか管見では、小島孝修が彦根市六反田遺跡（中期末～後期初頭の集落の河道南砂層出土）大津市穴太遺跡（後期後葉の配石遺構出土）の滋賀県の2例を紹介しているものがある程度である（小島2016）。

2 槻沢遺跡の丸石調査事例

槻沢遺跡の発掘調査の記憶と、報告書の遺物の出土位置がわかる遺構実測図と写真図版を見返すと、可能性のあるものも含め丸石は6軒の竪穴住居跡と、屋外の集石遺構・祭祀施設各1基から出土している。

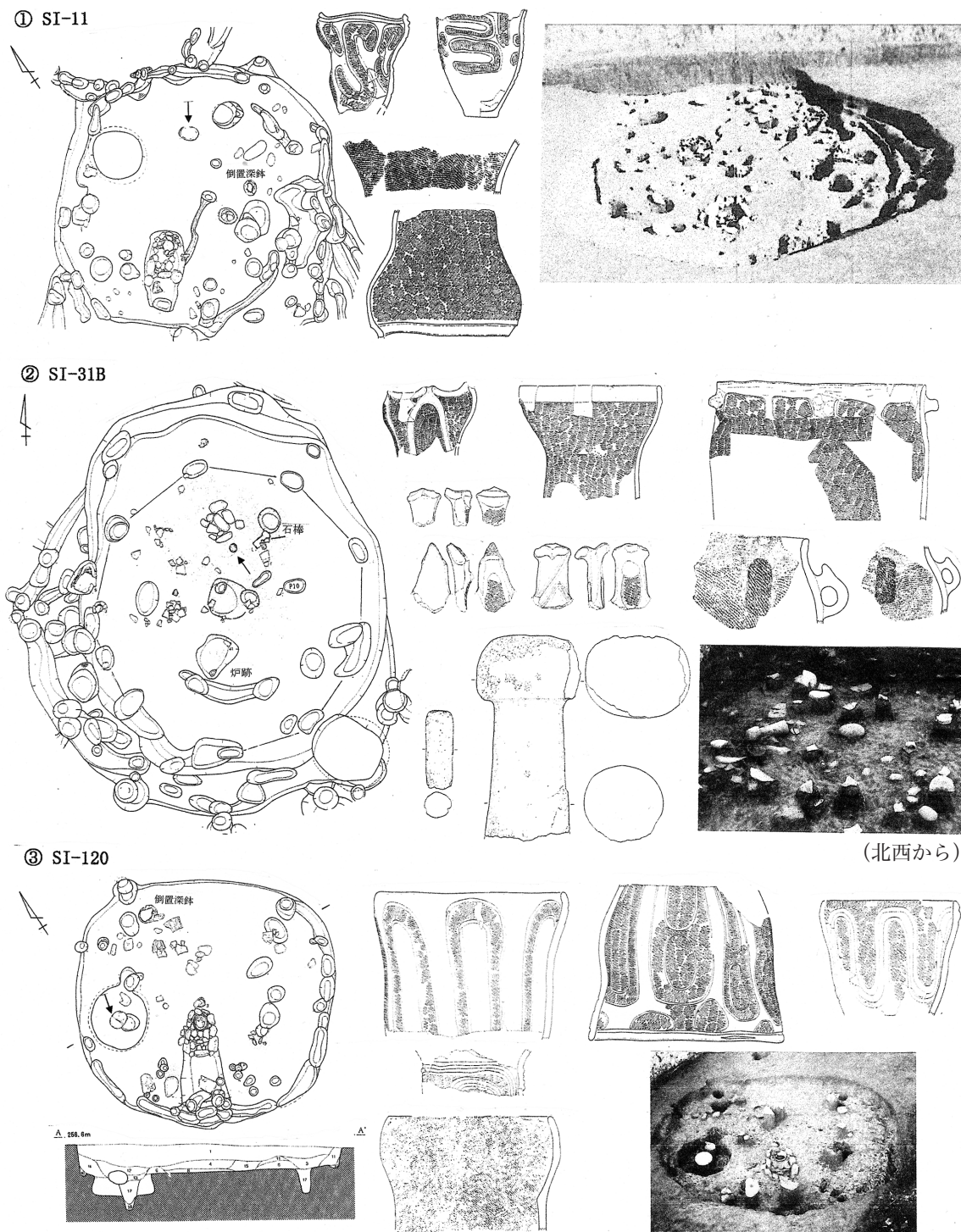
槻沢遺跡の報告書では、煩雑さを避けるため遺物の出土状態は図化した遺物を主に示した。調査時に掘り下げながら出土した遺物については、できるだけ出土状態を写真や実測図で記録しており、丸石の可能性のあるものについては原図や図版に掲載されていない写真でも確認を行った^(注1)。以下、丸石の出土した遺構の概要と出土状況について記す。

SI-11（第1図①）

東西4.3m、南北4.8mの楕円形プランの竪穴住居跡で、土層断面の観察から火災住居の可能性が高い。北側の主柱穴が炉の中軸線より若干東にずれるが3本主柱で、炉を挟んで対峙する一回り小さい掘り方のピットが補助柱穴と考えられる。炉は土器埋設複式炉で、埋設土器及びその周囲の石囲い、石組部や前庭部の各所に東北南部の複式炉の特徴が認められる。また、この炉の北東70cmほどに石敷き土器埋設炉が確認されている。

丸石は炉のほぼ中軸線上、奥側の支柱穴の南西から出土している。35×30cmの楕円球で、被熱により赤変している。また、住居東側からは倒置深鉢が出土している。時期は炉の埋設土器・炉前庭部から出土した土器・倒置深鉢などから、中期末葉大木10式古段階（加曾利EIV式）である。

SI-31B（第1図②）



第1図 槻沢遺跡の丸石出土遺構（1）

3 軒の住居跡が重複するが、丸石は最も新しい住居跡から出土している。東西5.4m、南北5.7mの円形プランで壁柱穴の竪穴住居である。覆土下層には焼土・炭化物を少量含む。炉は中央やや南寄りから、楕円形の鍋底状の掘り込みの地床炉が検出されている。中央から北側は3.0×2.5mの範囲で焼土床となっており、1.4×1.5mの範囲で平坦面を上にした大小9個の川原石を並べた敷石がみられる。掘り方底面に焼土と炭化物が認められ、建て替え前の住居の地床炉を埋め戻し整地したものかもしれない。遺物は多量の土器片と石器が多数の礫とともに住居全体から満遍なく出土している。

丸石は直径20cmほどの大きさのもので、住居の中央やや北側、敷石の南側の焼土床上から出土している。また40cmほど離れて、火熱を受け脆弱な大形の有頭石棒が出土している。このほか覆土中からは、深鉢の鳥頭形把手部3点、両耳壺把手部4点、直径4cmほどの太さの小型石棒などが出土している。時期は、石棒・丸石と同じ層中から出土した土器などから、後期初頭と考えられる。

SI-120 (第1図③)

東西4.6m、南北4.4mの隅丸方形プランで、4本主柱の竪穴住居跡である。炉は典型的な槻沢型土器埋設複式炉で、前庭部壁際がわずかに張り出し、対ビットが検出されている。土層断面などから火災住居と考えられる。北西主柱穴付近から倒置深鉢と胴部下半を欠く深鉢が横位で潰れた状態で出土している。

丸石は炉の西側、南西主柱穴際で出土している。34×28cmの楕円球の石で、被熱によりひび割れがみられる。出土土器から大木9式新段階（加曽利EⅢ式新段階）と考えられる。

SI-151 (第2図①)

東西3.9m、南北4.5mの楕円形プランで、4本主柱の竪穴住居跡である。土層断面などから土屋根の火災住居と考えられる。炉は槻沢型土器埋設複式炉である。前庭部は南側主柱穴からU字状の張り出し部に向かって窄まる特異な形状で、壁に向かって若干傾斜している。

丸石は33×27cmの大きさの楕円球で、被熱によりひび割れがみられる。炉の前庭部西側からの出土で、1mほど離れた東側からは安山岩製の大型石棒の体部（直径14cm）が出土している。出土土器や炉の特徴から加曽利EⅢ式新段階（大木9式新段階）と考えられる。

SI-153 (第2図②)

東西4.5m、南北5.2mのやや歪んだ楕円形プランで、4本主柱の竪穴住居跡である。西及び北側に拡張がみられる。覆土の状況などから火災住居で、炉は槻沢型石組複式炉である。北西コーナーから倒置深鉢、北東コーナーから小型の壺形土器が逆位で出土している。

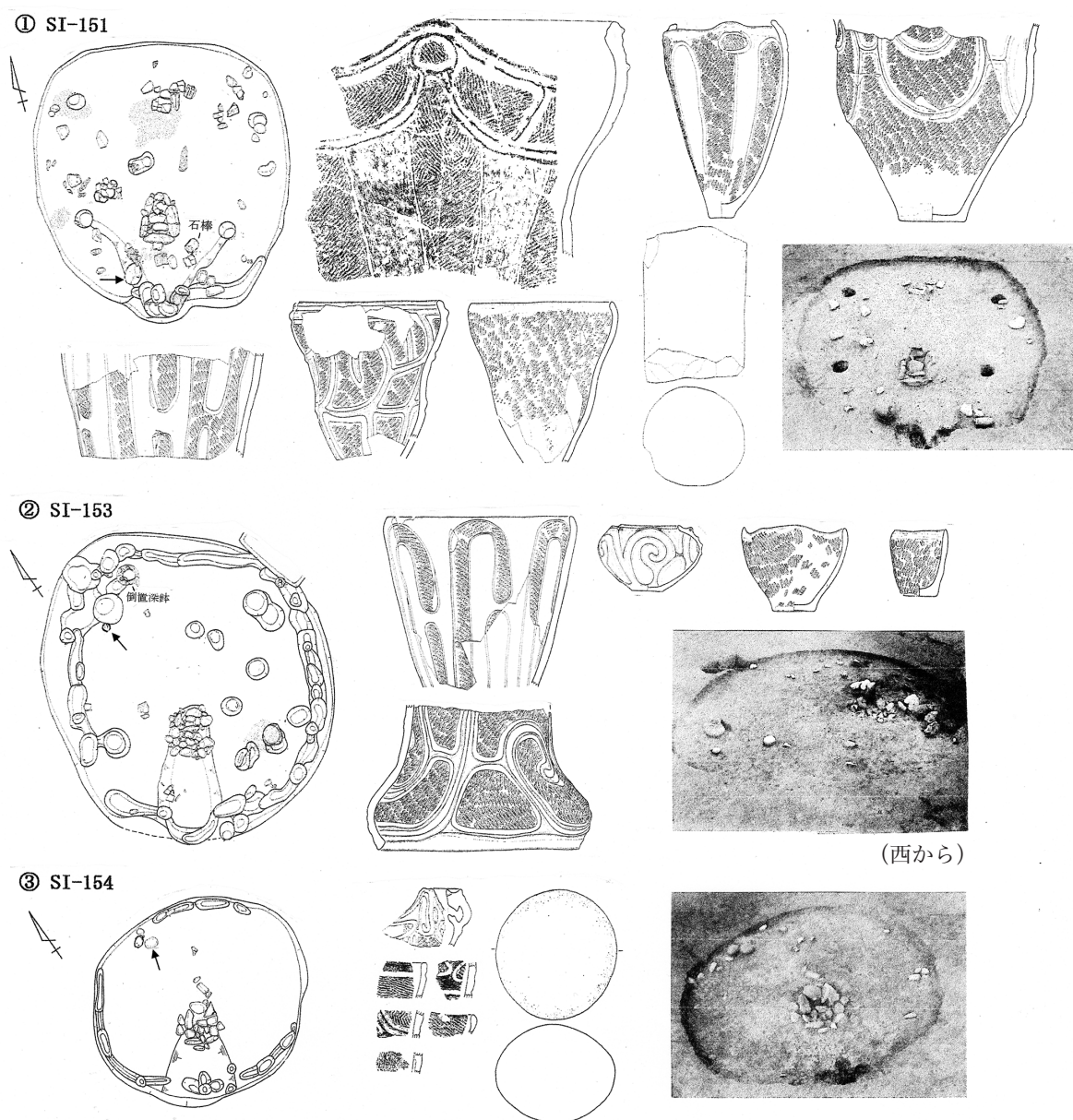
丸石は直径22cmほどの大きさで、奥壁側の左主柱穴脇の床面直上から出土している。出土土器から大木9式新段階（加曽利EⅢ式新段階）と考えられる。

SI-154 (第2図③)

東西3.4m、南北3.5mのほぼ円形プランの竪穴住居跡である。主柱穴は確認されなかった。炉はやや崩れているが槻沢型石組複式炉で、北西壁際から2個の丸石が出土している。一つは直径20cmほど安山岩の丸石で、僅かに磨痕がみられることから磨石として実測図を示している。もう一つもほぼ同じ大きさの楕円球である。出土土器は少ないが、炉の特徴から加曽利EⅢ式新段階（大木9式新段階）と考えられる。

SX-08 (第3図①)

中期末葉のSI-29の上面で検出された集石遺構である。6.5×4.5mの範囲で大小の礫が分布している。北側が密で、南側はやや疎らである。丸石は直径20cmほどの大きさで、中央やや西側、北側の濃密分布域の南から出土している。集石には磨石・凹石・石皿片、多孔石なども含まれており、被熱赤変しているものもある。



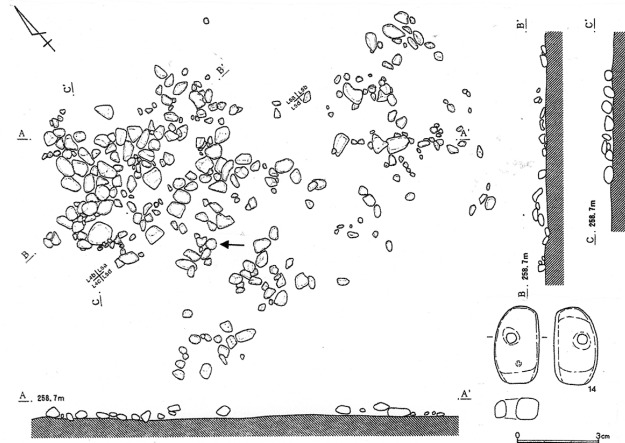
第2図 槻沢遺跡の丸石出土遺構（2）

覆土には骨片も少量含まれ、石製垂飾が1点出土している。小破片ではあるが出土土器と遺構の重複関係から後期初頭と考えられる。

SX-25（第3図②）

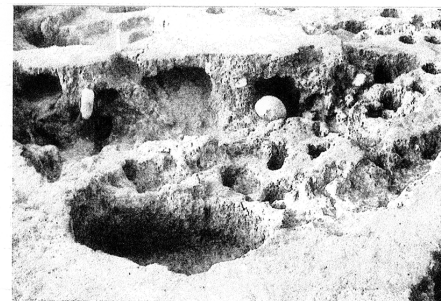
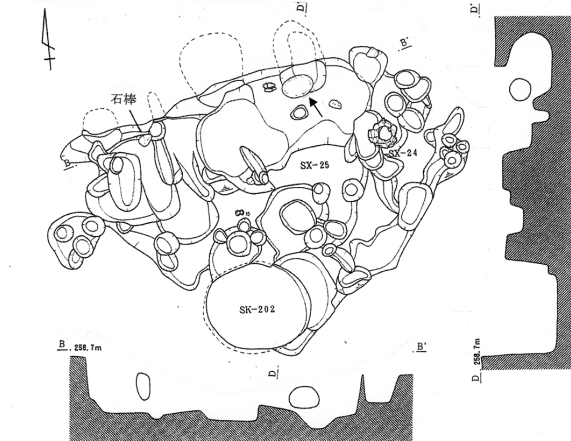
居住域の内側に位置し、SX-08の南側に近接する。土坑・ピット等との切り合いが激しいが、東西5m、南北4.2mの略三角形の掘り込みで、底面は凹凸が激しい。深さは確認面から深いところで95cmある。また、北側には4個の横穴が掘られており、前面には2mほどの間隔を置いて直径40cmほどの丸石と長さ40cmほどの柱状礫が正位で出土している。出土遺物は中期後半から後期初頭の破片のみであるが、上面で後期前葉と思われる土器埋設遺構が確認されていることから、SX-08とほぼ同じ後期初頭と考えられる。

① SX-08



(西から)

② SX-25



第3図 槻沢遺跡の丸石出土遺構(3)

3 周辺地域の丸石出土事例

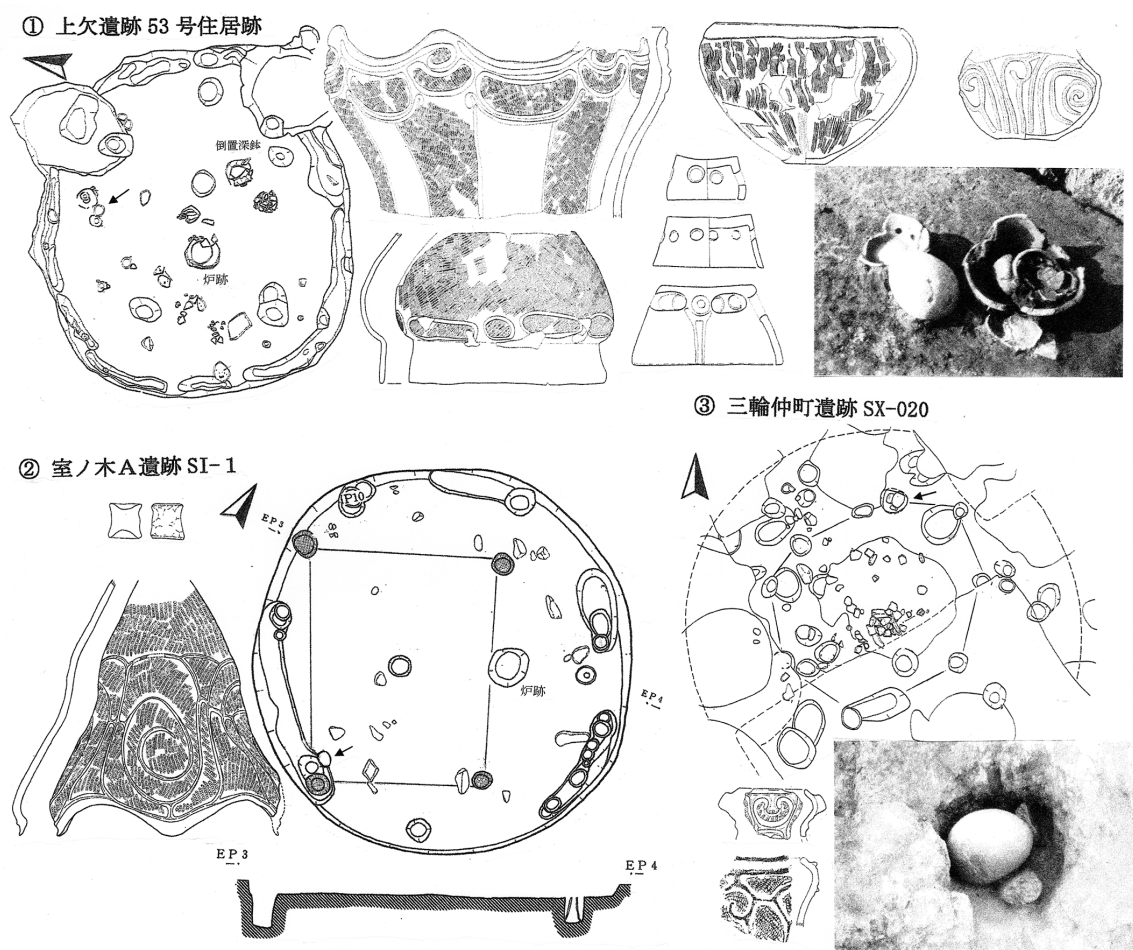
本県及び隣県の発掘調査報告書で、「丸石」と記述されたものは管見では知らない。遺物出土実測図や写真からの判断ではあるが、丸石の可能性のあるものを取り上げてみたい。栃木県の3例はいずれも槻沢遺跡発掘調査報告書刊行以前のものである。

上欠遺跡53号住居跡(宇都宮市上欠町、第4図①)

5.3×4.6mの楕円形のプランで、4本主柱の竪穴住居跡である。ほぼ中央に土器埋設炉が位置し、中央やや南東から胴部下半を欠く倒置深鉢、炉の北から口縁部を欠く小型壺が正位で出土している。丸石は直径20cmほどの大きさのもので、北側壁付近から伏せた状態の台形土器3点と出土している。出土土器から中期後葉加曾利EⅢ式新段階と考えられる(岩淵他1985)。

室ノ木A遺跡SI-1(第4図②、那須烏山市三箇)

5.8×5.7mの円形プランで、4本主柱の竪穴住居跡である。東側主柱穴間に直径60cmほどの地床炉があり、炉の前面には底部を意図的に打ち欠いた深鉢形土器を逆位に埋設した埋甕が検出されている。壁溝が途切れることから、この位置が出入口と判断される。土器は波状口縁の深鉢(梶山類型)で、煮炊きの痕跡が顕著である。炉の位置と柱穴の配置は複式炉住居の構造で、西側(奥壁側)の主柱穴が奥壁に接するのは、中期末



第4図 栃木県の丸石出土例

葉的那須地方の複式炉住居の特徴でもある。また、炉の前面の床が壁に向かって緩やかに傾斜しているのも、この時期の那須地方の前庭部の掘り込みが不明瞭な複式炉住居にしばしば見られる。

遺物出土状態写真から大型の礫が柱穴などのピットの脇から出土していることがわかる。南西（左奥）主柱穴際から出土している礫が、直径25～30cmの大きさの丸石と思われる。時期は埋甕の土器から中期末葉加曽利EIV式期である（木下1993）。

三輪仲町遺跡SX-020（第4図③、那珂川町三輪）

古代の竪穴住居跡によって壊されるなど壁は確認されていないが、柱穴と推測されるピットから直径5mほどの住居跡と考えられる。炉は石敷きの方形石囲い炉で、2点の石皿を側石に用いている。住居側縁に比べ中央側の上端が高く、焚口が南側であることが想定される。北側のピット内から人頭大の河原石が出土しているとの記載があるが、出土状況の写真から直径25cmほどの大きさの丸石と思われる。時期は中期末葉加曽利EIV式段階である（塚原他1994）。

前山A遺跡SI-5（第5図①、福島県双葉郡富岡町）

7.6×6.8mの楕円形プランで、遺跡内最大規模の住居跡である。建て替えがある住居で、旧住居は6本主柱、新住居は7または8本主柱である。新炉の縁石の多くは抜かれ、前庭部も不明瞭であるが大形の石組複式

炉であろう。P2の付近には直径30cmの円礫が置かれていたとの記述があり、炉の左前主柱穴付近に置かれた丸石であろう。写真からの判断ではあるがSI-7と同じ花崗岩と思われる。時期は出土土器から中期後半大木9式期前半と考えられる（菅原他2003）。

前山A遺跡SI-7（第5図②、福島県双葉郡富岡町）

6.9×6.5mの楕円形プランの大形の竪穴住居跡で、6本主柱である。炉は石組部と前庭部からなる石組複式炉である。南東隅で一抱えほどの丸い花崗岩が据えてあるという記載がある。北西に複式炉が付設されていることから、住居奥壁際に据えられた径30cmほどの丸石であろう。時期はSI-5と同じ大木9式期前半と考えられる（菅原他2003）。

馬場前遺跡86号住居跡（第5図③、福島県双葉郡双葉町）

直径6mほどの略円形プランで5本主柱の竪穴住居跡である。覆土等の状況から火災住居である。炉は土器埋設複式炉で、複式炉中軸線上の奥壁には弧状の壇状施設がある。壇状施設の東側には立てかけられたような状態で石棒（棒状礫）が出土している。写真と図面からの判断ではあるが、周囲には倒置深鉢を含む5個の土器と丸石（24×20cmの楕円形の多孔石と直径16cmの円礫）が床面に置かれたような状態で出土している。東主柱穴際には袋に入れられたと思われる34点の剥片・石核と磨石が集中出土している。また、廃屋儀礼に伴う複式炉の止めの行為が行われている。時期は大木10式古段階である（三浦他2003）。

4 丸石出土状況の特徴

まず、槻沢遺跡の丸石を出土した遺構の特徴を見てみたい。時期については縄文時代中期後葉から後期初頭で、中期後葉加曽利EⅢ式期の竪穴住居跡が4軒、中期末葉加曽利EⅣ式期と後期初頭の竪穴住居跡が各1軒である。集石遺構と特殊遺構（SX-25）各1基については、遺物が少なく時期を絞り込むことは難しいが、遺構の重複などから後期初頭と考えられる。

竪穴住居跡は6軒中、中期後葉～末葉の5軒が台地緩斜面下のB区北端からG区の30mほどの範囲にある。後期初頭の竪穴住居跡・集石遺構・特殊遺構は台地上のA区の15mほどの範囲に集中している。竪穴住居跡の丸石の出土位置については、住居の奥側が4軒、炉の前庭部と炉左主柱穴際が各1軒で、床面直上出土である。また、中期後葉～末葉の住居跡5軒中、火災住居が4軒、倒置深鉢が出土している住居が3軒とその割合が高い。また、石棒が出土している住居が2軒あり、SI-31Bでは近接して、SI-151では炉の中軸線を挟んで前庭部から出土している。SX-25は石棒と近似した性格をもつと思われる柱状礫（立石）と丸石が2mの間隔をおいて出土している。

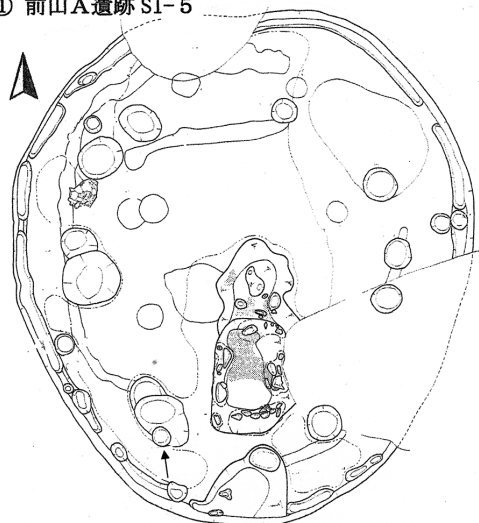
つぎに、県内3例、福島県2遺跡3例を、槻沢遺跡と比較しながらみていきたい。いずれも竪穴住居跡からの出土である。時期については、前山A遺跡の2軒が大木9式前半段階で、槻沢遺跡より1段階古い住居である。ほかの4軒は中期後葉～末葉で槻沢遺跡とほぼ同じである。出土位置については、前山遺跡SI-5が槻沢遺跡SI-120と同じく複式炉の左主柱穴の脇から出土している以外は奥側からの出土で、室ノ木A遺跡SI-1が槻沢SI-153と同じ左奥主柱穴脇、前山A遺跡SI-7が槻沢SI-154と同じ奥壁際からの出土である。三輪仲町遺跡SX-020は奥壁際ピット内からで、このような出土例は確認されていない^(注2)。炉の左側主柱穴脇が1例あるが、住居の奥側からの出土が多く、さらに炉の中軸線より左側の主柱穴周辺から壁際から出土するものが少なくない。

共伴遺物等については、上欠遺跡53号住居跡、馬場前遺跡86号住居跡で槻沢遺跡SI-153同様、倒置深鉢・小形壺が出土している。馬場前遺跡86号住居跡は火災住居で、奥壁の壇上施設の横に石棒（棒状礫）が立て

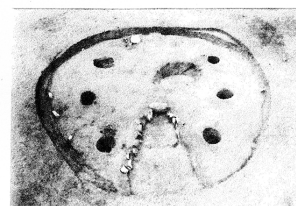
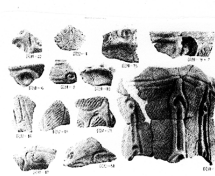
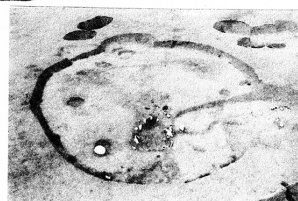
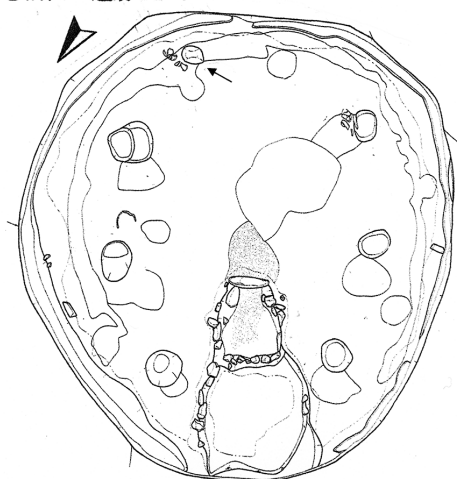
かけられ、その前に倒置深鉢を含む5個の土器と丸石が出土しており興味深い^(注3)。石棒と丸石の共伴については、前述した槻沢遺跡SI-31B・151、SX-25がある。

以上、槻沢遺跡及び管見の栃木県及び福島県の丸石の特徴をまとめると、出土する遺構の時期は中期後葉加曾利EⅢ式段階を中心とした中期後半から後期初頭で、竪穴住居跡からの出土が多く、後期初頭には屋外施設からの出土例がみられる。出土位置は炉の左支柱穴脇からの出土も数例あるが、住居の奥側が多く、炉を中軸

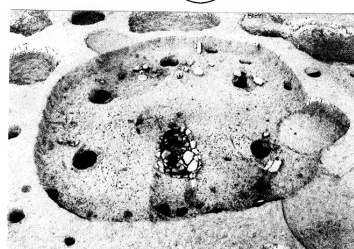
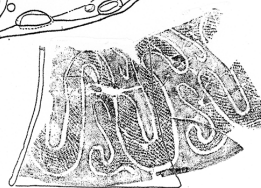
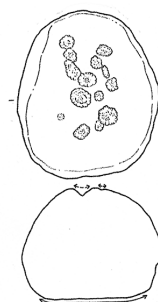
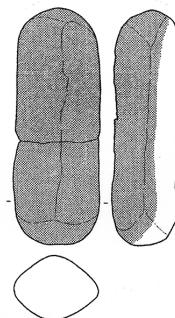
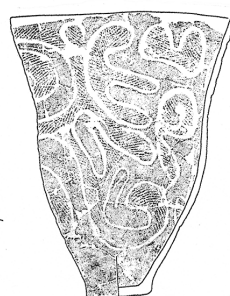
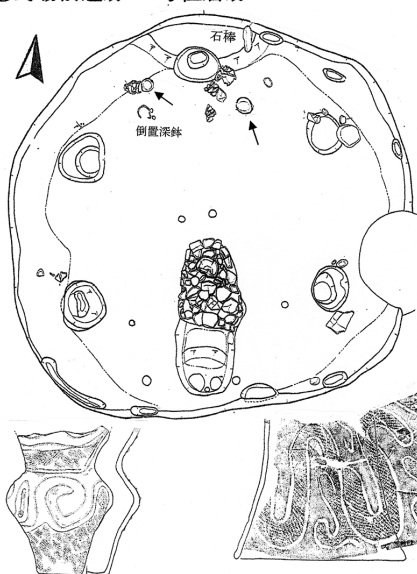
① 前山A遺跡 SI-5



② 前山A遺跡 SI-7



③ 馬場前遺跡 86号住居跡



第5図 福島県の丸石出土例

線とした左側の主柱穴脇や奥壁際からの出土が少なくない。また、火災住居の割合が高く、倒置深鉢・小形壺・石棒などとの共伴もみられる。これらは、前節の丸石の研究史抄の田代・新津が指摘した甲信地方の丸石の特徴とほぼ合致する。

なお、田代の指摘した③中期後半に曾利式土器文化圏の中に入るについては、中期後半大木8b式段階に曾利式・曾利式系土器が栃木県、さらには福島県中通りや浜通りまで分布がみられること^(注4)、栃木県東部那須地方を中心とした東関東北部から福島県南部に中期後葉加曾利EⅢ式段階の土器組成に変容著しい曾利式系土器が加わること（後藤2017a）と関連が深いと考えられる。

5 まとめ

本稿では、栃木県の縄文時代の丸石について槻沢遺跡と県内と福島県の数例取り上げ、時期や出土状況、共伴遺物などについて述べてみた。槻沢遺跡の発掘調査報告書で丸石の存在に注目してから、これまで県内の埋甕や倒置深鉢、曾利式系土器、敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容などをまとめる中で、丸石も甲信地方に源流が求められる遺物として触れてきた（後藤2009・2017a・2017b・2020）。そして今回検討した結果、前節で述べたとおり甲信地方の丸石と酷似した傾向を再確認することができた。

最後に、これらの出土状況・共伴遺物などを踏まえ、丸石の性格について考えてみたい。火災住居についてはこれまで前稿（2017b）などで述べてきた通り、失火によるものではなく、家長の死や禁忌行為の発生で意図的に住居に火をかけ「送る」廃屋儀礼の最終段階の行為の一つである。そして、倒置深鉢や壺形土器・台形土器・石棒・丸石などはその祭具と考えられる。石棒については豊饒や再生のほか、祖先崇拝などの祈りの道具であり、丸石も石棒と対をなす道具のひとつと考えられる。丸い形からは新しい生命の誕生を意味し、死から再生を祈念する生への儀礼の中で用いられたものと考えられる。

なお、立石と丸石が対峙して出土したSX-25のような遺構は、屋内例は馬場前遺跡86号住居跡が近似するが、屋外例は未だ類例を知らない。

おわりに

30年ほど前の槻沢遺跡の発掘調査ではあるが、当初丸石を認識していなかったことへの自戒と、縄文時代の遺跡から出土する丸石や大きな自然礫についても、当時の人が何らかの意図をもって遺跡・遺構に運んできて置いたものもあり、今後できる限り記録していただきたいという願いも込め、起稿してみた。遺構や遺物、そして遺物の出土状態から人の行動や考えを読み解く考古学研究では、発掘調査の記録が頼りである。出土した土器などの遺物が接合され、詳細に観察できると違って、遺構と遺物の出土状況が確認できるのは現場のみで、そのためその記録は重要となる。「見逃したこと」が「ないこと」となってしまうためにも。

なお、槻沢遺跡発掘調査の遺構・遺物出土実測図及び写真の再確認については、移管先的那須野が原博物館坂本菜月さんに大変お世話になりました。記して謝意を表します。

追記：脱稿後、昭和52年度調査の槻沢遺跡2号住居址でも丸石が出土していることを知った（海老原郁雄他1980『槻沢遺跡』栃木県教育委員会）。覆土の状況から火災住居で、炉は槻沢型土器埋設複式炉である。丸石は20～25cmの大きさで、奥壁側のピット付近から2個の倒置深鉢と出土している。時期は加曾利EⅢ式新段階（大木9式新段階）である。

注

- 1 報告書の遺構実測図に示していない丸石については、遺物出土状態写真及び遺構・遺物出土実測図の原図からその位置を落とした。
- 2 ビット内出土例は、甲信地方で数例確認されている。新津健は石囲い炉の中の丸石、柱穴内の丸石、入口部埋甕上の丸石を廃棄の次にくる新しい命を期待した祈りを意味するものではないかとしている（新津2017）。
- 3 甲信地方では奥壁側の石壇や祭壇に釣手土器などの特殊土器・倒置深鉢・石棒・丸石などの遺物が出土する例が少なくない。奥壁の大型浅鉢を囲んで5個の倒置深鉢と2個の丸石が出土している長野県小諸市郷土遺跡24号住居跡などは酷似した事例といえよう。
- 4 前節で取り上げた福島県富岡町前山A遺跡でも、大木9式前半の住居跡から曾利式系土器や連弧文土器が出土している。大木8b式期に遡る曾利式系土器については、本県でも宇都宮市梨木平遺跡、那須烏山市小鍋前遺跡など散見できるが、福島県でもいわき市や郡山市、さらに北の福島市宮畑遺跡でも出土している。

参考文献

- 岩淵一夫他 1985『上欠遺跡』（『栃木県埋蔵文化財調査報告』第65集）栃木県教育委員会
- 大場磐雄他 1976『上原』長野県文化財保護協会
- 木下 実 1993『室ノ木A遺跡』（『南那須町文化財調査報告書』第10集）南那須町教育委員会
- 小島孝修 2016「滋賀県出土の「丸石」研究ノート」『紀要』第29号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 後藤信祐 1996『槻沢遺跡』Ⅲ（『栃木県埋蔵文化財調査報告』第171集）栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 後藤信祐 2009「栃木県における縄文中期後半～後期前半の「埋甕」の様相」『野州考古学論攷—中村紀男先生追悼論集—』中村紀男先生追悼論集刊行会
- 後藤信祐 2017a「栃木県における曾利式系土器の様相」『研究紀要』第25号（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2017b「栃木県における倒置深鉢の様相—那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査事例を中心に—」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀の考古学の現在』六一書房
- 後藤信祐 2020「栃木県北東部における敷石住居の出現と柄鏡形住居の受容—那須塩原市槻沢遺跡の発掘調査成果を中心に—」『研究紀要』第28号（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2022「福島県の倒置深鉢の様相—縄文時代中期後半～後期初頭の住居床面出土例を中心に—」『福島考古』第64号 福島県考古学会
- 菅原祥夫他 2003『常磐自動車道遺跡調査報告35 前山A遺跡』（『福島県文化財調査報告書』第399集）福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団
- 田代 孝 1989「縄文時代の丸石について」『山梨県考古学論集』Ⅱ（『山梨県考古学協会10周年記念論文集』）山梨県考古学協会
- 塚原孝一他 1994『三輪仲町遺跡』（『栃木県埋蔵文化財調査報告』第143集）栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 中沢 厚・武藤雄六・小林公明・島 亨・平出一治 1981「座談会 丸石神と考古学」『どるめん』第28号 JICC出版局
- 新津 健 2014「Ⅶ 中部地方の縄文集落の信仰・祭祀」『シリーズ 縄文集落の多様性Ⅳ 信仰・祭祀』雄山閣
- 新津 健 2017「半球顔面把手—縄文球形論への手がかり—」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀の考古学の現在』六一書
- 松村佳幸 2017「丸石」『平成28年度 北杜市考古資料館企画展 祈りの風景～北杜の石棒と丸石～』北杜市考古資料館
- 松村佳幸 2022「丸石の考古学的研究—北杜市内における縄文時代の丸石—」『山梨県考古学協会誌』第29号 山梨県考古学協会
- 三浦武司他 2003『常磐自動車道遺跡調査報告34 馬場前遺跡（2・3次調査）』（『福島県文化財調査報告書』第398集）福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団

- 宮坂英弐 1955「長野県諏訪郡中原遺跡」『日本考古学年報』4 日本考古学協会
八幡一郎 1976『信濃大深山遺跡』川上村教育委員会